

第4回世田谷区総合教育会議

日：平成27年11月10日（火）

場所：世田谷区役所第一庁舎5階庁議室

午前11時開会

保坂区長 皆様こんにちは。世田谷区長、保坂展人です。これより第4回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

教育委員の皆様におかれましては、もう既に4回目ということで、また今回もよろしくお願いたします。

この総合教育会議は、自治体の長としての私と教育委員の皆さんが教育政策について区民公開の場で議論をしていく場でありまして、世田谷の教育のテーマをさらに掘り下げていこうという趣旨で始まっております。

ただ、この総合教育会議自体、これだけではさらに議論を周知していき、また区民と共有していく部分でやや不足があるというふうに教育委員会とも相談をいたしまして、教育委員会の主催の教育推進会議と同日開催という手法を2回ほどやらせていただきました。7月にやり、また先月に行った結果、多くの区民の方が参加もしていただき、大変密度の濃い、特に先月、10月にはワークショップということで、課題を直接議論していただくことも含めて進めてまいりました。参加と協働、そして情報公開、こういう手法の中で教育政策の課題なり現状を共有しながら、そしてこれからどうそれを打開、解決、改善していったらいいのかということ、幅広い共有をできたものと思っております。

きょうの会議ですが、これまでの議論を少し振り返ってみて、そして今年度の締めくくりの議論をしたいと思っておりますし、また、来年度以降もこの総合教育会議についての展開をしっかりやっていきたいということでありまして、最後までよろしくお願したいと思っております。

まず、出席者の御紹介でございます。お座りの順から、教育委員でいらっしゃる井上委員でございます。永井委員でございます。澁澤教育委員会委員長でございます。原委員でございます。堀教育長でございます。

当初の予定では、ここから前回、前々回、今年度の歩みを振り返る予定だったのですが、教育委員会のほうで、昨年はオランダの教育視察を行いました。大変成果もあり、これについて先月は少し写真なども出して御報告をいたしました。今年度はフィンランドの教育視察を教育委員会として行って、数日前に堀教育長は帰ってきたばかりということなので、本編の議論に入る前に、フィンランドの教育委員会としての教育視察で、こんな状況でしたという御報告を10分ほどいただいて議論に入りたいと思っております。

堀教育長 それでは、説明させていただきます。

(スクリーン使用)

堀教育長 今年度は、11月1日から7日まで、小中校長、副校長、主幹教諭、幼稚園の副園長、統括指導主事、私の9名で行ってまいりました。昨年度のオランダも大変成果のある海外教育視察でしたが、自己評価ですけれども、それを上回る内容だったかなと思っております。11月は、フィンランドの方々には言わせると憂鬱な時期が始まる時期だそうです。日の出が7時20分、日の入りが4時で、子どもたちは暗い中懐中電灯を持ちながら登校するというので、案内していただいた方のお話ですと、もう既に生きる力がそこで始まっているということをおっしゃっていました。そういう環境の中で子どもたちは育ちます。フィンランドは2学期制ですが、11月はそういうところが始まるということで大変憂鬱な時期になっております。日本からよくいらっしゃいましたというふうにウエルカムされましたが、そういう時期に参りました。

この写真は、次の次のあたりに出てくる小学校ですが、その中の1年生のクラスの後ろにあるコーナーです。フィンランドは、芸術とかものづくりに対して大変力を入れております。御案内のように、例えばシベリウスとか、あるいはノキアに代表されるIT関係、それと北欧の家具に代表されるように、大変ものづくりに力を入れておまして、各教室では子どもたちがこれをつくっておりますが、1つずつふえていくようです。あと、予算の1%、その予算が運営費なのか改築費なのかを聞くのを忘れましたが、1%は必ず文化に充てるということで、これは小学校ですが、最後に保育園が出てきたときは、地元のアーティストの方による彫刻が部屋のあちこちに置いてありまして、大変小さなときから芸術、文化に接するという環境にあることがわかりました。

次の写真です。今回、小学校は小中一貫校が1校、それから小学校単体が1校の2校を訪問させていただきました。これは職員室ですが、職員室といいますと、皆さんもイメージされると思いますが、ずっと先生方1人1人の机が並んでいてというようなイメージですが、こちらは先生方が交流するというスペースです。一番奥のほうにあります。必ずコーヒーコーナーがあります。会議体ではなく、北欧の椅子ですね。ああいうカラフルな椅子があって、そこで皆さんが談笑しながら意見交換するというのが職員室だそうでした、これは小さいほうの職員室でした。

次の写真ですが、これが私どもが行った最初の小中一貫校です。フィンランドはPISAでずっと好成績を上げておりましたが、トップの座を譲るということとか、移民への対応ということで、今まで教育を初めケアと申しておりましたが、予算が潤沢に使える環境

にあったそうです。それがなかなか困難な時期に来たということで、コアカリキュラムを改正しようという動きが来年度からあります。これは、それを先駆的に取り組んでいる学校なんです、ちなみに、コアカリキュラムの3つの特色は、子どもたちが学校運営に参加すること、それと教科連携型、これは今回の次の学習指導要領で日本でも論点の1つに掲げておりますが、教科連携型をしていくということ。それと、異年齢ですね。年齢を越えた形、異年齢で、ちょっとイエナプランに似ておりますが、そういう形で教育を進めていこうというふうなことが来年度から始まるそうです。それに向けて、これが先駆的に行っている学校ということで訪問させていただきました。

大変子どもたちの学ぶ環境が自由でして、いわゆる楽しく学ぶということが1つのコンセプトなんです。これは、コアカリキュラムではなくて、フィンランドの国自体が教育先進国としての1つのスタイルだと思いますが、自由に学ぶ、楽しく学ぶということが基本にあります。まず驚いたのは、これは教室なんです、ソファがあります。その下にじゅうたんがあるんですけども、また幾つか大小の小さなソファがありました。こういう中で、子どもたちが思い思いの姿で勉強しています。これが、年齢が上がるにつれて、何とイヤホンをして音楽を聞きながら数学を解いたり作文を書いたりという姿を見まして、私たちはちょっと驚いて、これが将来の学ぶ姿なのかということでカルチャーショックを受けております。フィンランドの方もちょっとショックを受けているようですが、全てが来年からこう変わるというわけではなくて、こういう子どもの楽しく学ぶ、そういう環境を大切にしていこうということの1つのあらわれのようです。

次に、これが図書館です。図書館もちょっと驚きの連続で、大変申しわけないんですが、これは大きい図書館でした。私どもはフィンランドの4つの市を訪ねました。ヘルシンキを中心に、4つの市を連携した図書館が、ヘルメットと言っていました、その4つの市が連携してこういうサービスをしております。これは、1階にある子どもコーナーですが、真ん中で子どもたちがパソコンゲームに興じております。ただ、こういうことができるのは宿題をやっている子に限るという条件つきだそうです。それと、あとここにジャンパーを着た人がおりますが、この方はユースセンターの職員です。ユースセンターは、日本で言うと児童館ですね。児童館の職員なんです、こういうふう子どもたちが楽しくかつ健全に遊ぶように、ちょっと様子を見ながらサポートしている姿です。

次のこれも図書館です。図書館といいますが本がいっぱいあるイメージですが、ここはさすがものづくりというところと、いろんな意味で有効に使いたいということで、これは

Tシャツにプリントするプリンターですね。それと、見えないんですけども、こちらではプログラムをつくるシステムについての勉強をやっておりました。これがものづくりの機械ですね。こちらのほうにまた3Dプリンターとか工具一式とかがあります。ちょっと奥のほうにはCDとか、自分たちがつくった音楽をCDにするとか、あるいは練習をするとかいうコーナーもありまして、とても図書館とは思えない光景が続いておりました。午前中は高齢者が、午後は子どもがというような図書館でした。

フィンランドはやっぱり移民の方を受け入れるようでした、先ほど1階の子どもコーナーを見ていただきましたが、その奥に、さらにいわゆる課題を抱えているだろうという子どもたちが集まってきておまして、そこではゲーム、それからいろんな手づくりの遊びとか、そういうコーナーがかなり広くありまして、そこにもユースセンターの職員が数名おまして、話し合いをしたり、相談に乗ったりしておりました。図書館ですのでできるだけ本に親しんでもらおうということで、漫画とか、日本の漫画ですね。子どもの本等が置いてあって、たむろって遊んでもらってもいいけれども、いつかは本に触れてほしいというような環境づくりをしておりました。

次の写真ですが、これが先ほどお話しした小中一貫校ですね。クオッパヌンミ市の小中一貫校です。このスタイルを見ていただきますとちょっと安心するかと思うんですが、こういう形で、これは1年生です。最初に見ました縫いぐるみはあそこの子どもたちがつくっているんですが、この授業はやっぱりものづくりをしておまして、これから始まるんですが、先生が1人ですけれども子どもたちは十五、六人くらいでしたね。その子どもたちに向かって、いろんなサポートをしております。

次に、これが小中一貫校です。8年生、9年生がやるサポートスチューデント制度というのがありまして、8年生、9年生ですから日本で言うと中学2年生、3年生の子どもたちです。一貫校なんですが、やっぱり中1プロブレムというものがあるそうです。この子どもたちは、そういうことを解消するためにダンスパーティーとかいろんなイベントを自分たちで企画しております。小学校が終わって中学校に入るときに、子どもたちのサポートはもちろんなんですが、親御さんたちに対して、私たちが面倒を見ますので大丈夫ですよということを、この子どもたちがするそうです。こういうサポートスチューデントという制度も見てまいりました。

次に行っていただきまして、これが先ほど話しましたユースセンターです。日本の児童館とちょっと違うなと思ったのは、このユースセンターは、学校とかなり密に連携してお

ります。スクールソーシャルワーカーかなと思ったんですが、どうもメモを見ますとスクールカウンセラーのようなんです。学校にスクールカウンセラーがおりますね、その者から各ユースセンターに、こういう課題を抱えている子たちがおりますということで、名前が出てくるそうです。このユースセンターは学校を一、二校対応するそうですが、1人1人の子どもたちのカードがあります。家庭の環境とか、どういうところに課題を抱えているかということ、この一番奥にお2人いらっしゃいますが、この方とこの方と3人で、多いときで80名、週3回ほどですが、60名から80名の子どもたちに対応して、学校と連携しながらサポートしているようです。

この女性の方は、行政のほうと連携しております。きょう午前中に教育委員会を開かせていただきまして、そこで澁澤委員長から福祉との連携が国の話で出てまいりましたが、このユースセンターの職員は社会福祉課と連携しております、例えば子どもがたばこを吸う、悪さをするという場合は、すぐ社会福祉課にこの人から連絡が行く、あるいはこちらの方々から学校に連絡が行くというような形で、学校と行政と連携しながら子どもたちをサポートしているという内容でした。この施設は余り大きくなく、420平米とおっしゃっていましたが、これは演劇とか何かをするステージです。ここでディスコパーティーとかいろいろやるようでして、なぜか卓球も人気でした。

次を出していただいて、私が写っておりますが、ここが子どもたちに一番人気の部屋なんです、ビリヤードがなぜか人気ということです。子どもたちは、この部屋と、先ほどのディスコと、応接室と、あともう1つありましたね。そういうところに60名から80名の子どもたちがそれぞれ集まって、この職員たちのサポートを受けながら成長するということで、ユースセンターというのはすごいなと思って見てまいりました。

これが保育園です。保育園は2つ見てきました。小学校に併設している保育園と、単独で存在する保育園の2つです。今回のフィンランド海外視察の目的の1つは、いわゆる幼児教育を見てきたいという考えもありました。幼児教育の中身は、非常に子どもたちの自主性を尊重しております。これは演劇ですが、子どもたちが自分で考えて、ここに寝ている子たちがいるんですが、そういう子たちも踏まえて、自分たちで考えて演劇をすることがあったりとか、あと、もう既に2歳でデジカメを持って、自分で一番大好きなところをうちに持ち帰って撮ってくる、それをみんなの前で発表する。あるいは、もう6歳からその編集を自分たちでしてITに触れるという、そういうメディア教育も熱心に行われておりました。

フィンランドの特徴は、プリスクールといいまして、就学前教育が、来年から始まるということがありますが、もう既に行っております。次の光景は、これはハンガリー式算数遊びという内容ですが、ここに数字があるんですね。1、3、5とか、1つ下がってごらんとか、これをやりながら遊んでいて学ぶ。楽しく遊ぶということが前提ですが、身の回りのものを使ったりとか、そういうことで、いわゆる勉強ではなくて楽しく遊ぶということを前面に出しております。

それと、子どもたちが大変生き生きとして遊んでおりまして、この先生はそういう教材を熱心に集めておりました。どうしても小学校に上がる時には算数とか表現するというのが苦手なんですけど、ここでは小1プロブレムの解消にもこのハンガリー式算数教育というのがありまして、とてもスムーズにいくという話を聞いております。

次の保育園は、森の中にあるハーパヤルビ保育園ですが、やはり同じように算数で遊んでおりまして、ここはもう100年以上続く古い木造の、昔学校であったところの保育園のプリスクールです。やはり6歳から学んでおります。

最後の写真になります。子どもたちが遊んでおりますが、零下15度まで必ず外に出して遊ぶというのがフィンランドの学校のスタイルのようです。ですので、休み時間となりますと重装備だなと思うんですが、このときももう霜柱が出ておりましたが、必ず外に行くと子どもは遊んでおります。そういう意味では、体力というものも重要視してはいたし、自然と向き合うということとか、こういうふうに遊びながら学ぶということを幼児教育の中では実践しているなという思いがしました。

最後になりますが、これがメンバーです。これがもう100年以上続いた保育園ということで、この9名で勉強しに行つてまいりました。

駆け足で説明させていただきましたが、こういう内容を、私ども第2次教育ビジョンを展開中ですので、その具体的な施策の中に反映していきたいと思っております。

以上です。

保坂区長 ありがとうございます。十分な時間でなく10分という予定で、お話がもっとあったかと思えますけれども、せっかくですから二、三疑問に思ったこととかがあったらということで、私のほうから1つだけ。ユースセンター、若者センターのほうは、学校が終わる時間とユースセンターに子どもとか若者が行く時間のたまかな区分というのはどうなっていましたか。

堀教育長 午前は高齢者や地域の方々に開放しているようです。学校が終わってから受

け入れるということになっているようですので。ユースセンターの職員は、午前中は見ているだけというんでしょうか。あと、先ほど見ましたように図書館とかあちらのほうにも出かけていきますので、児童館の中だけでの対応ではなかったなという気がしていますし、それと、学校や他の図書館みたいに連携がすごいな、それも組織的に連携しているということは、ちょっと違うなという形は感じました。

保坂区長 ごらんになって、何か御質問とかいかがですか。

井上委員 幼児教育のスライドが幾つかありましたけれども、その中で教育長は幼稚園とは言わずに保育園という言い方をされていましたが、そのことについて何か理由はあるのですか。

堀教育長 井上委員は多分御存じでお聞きになっていると思うんですが、こちらには幼稚園、保育園の別はありません。全て保育園という形で行われておりました。1歳から就学前という形で行われているようです。ですので、就学前の教育が小学校に上がるときにはああいう今回のプリスクールという形で取り組んでおられましたけれども、非常に、親にとっても小1プロブレムの解消ができますし、あと、ネウボラという制度がありますので、子どもができるまではお母さんのネウボラ、保育園に入ってから子どもたちのネウボラということで、子どもを中心に関係の方々が非常につながっているというイメージは受けました。

保坂区長 永井さん、何か感想でも。

永井委員 今の井上委員の話を受けてという感じなんですけれども、日本ではお母さんというか保護者が働いていて、保育できないから保育園に入れるというふうな制度だと思うんですけれども、そういった制度ではないということなんですか。

堀教育長 いろんな制度があるようですが、その前に、フィンランドは就業時間が8時から4時で、残業がないんです。ただし、8時という時間は、先ほどお話ししましたように日の出が遅いということもあり、シフトの時間もありますので、子どもは6時半から来ることもあるそうです。それと、ああいう1カ所に集まって保育をするのと、あと資格を持った方々が、日本で言うと保育ママさんのようなあれでしょうか。小さな場所で保育しているところと保育ママさんとがあって、家庭保育というのも若干あるようですが、基本的に幼稚園、保育園がありませんので、小さいときからそういう集団で学ぶということと、基本的に女性の方は働くのが当たり前というような環境で、女性の社会という変ですけどもそういう前提でありますので、そういうサポート体制がとられております。

6時半から来る子たちは、保育園で給食を食べます。ですので、日本ではちょっと考えられないなと思っていますが……。

保坂区長 それは朝ですか。

堀教育長 朝御飯です。6時半から預かりますので、7時、8時ぐらいには給食を食べるということで、そういうシステムがあるのでお母さんたちは働けるということと、あと残業がありませんので、4時に終わったらお父さんもお母さんもすぐ帰るという感じですね。

保坂区長 そろそろ本編に入りたいところではあるんですが、何かありますか。よろしいですか。では、後ほどまた議論の中で出していいただければと思います。

本日は12時20分終了予定ということで、そもそも1時間の予定を少し伸ばしたんですが、フィンランドに行ってきたさまざまなごらんになってきたということも、今後よりまとめて報告をいただければと思います。

では、2枚皆さんのところに資料をお配りしていますが、こちらの横長のA3の紙をごらんいただきながら、振り返りをしたいと思います。

今年度の取り組みについて、これを議題の1にいたします。

「世田谷区総合教育会議と教育推進会議の平成27年度全体像」というプリントがございます。左側から、1回目の5月25日はこの場で、庁議室で開催しました。ここでは教育委員の皆さんのそれぞれの問題意識を語っていただき、また、会の持ち方について議論をさせていただきました。そして、ぜひ区民に公開する形、そしてまたきょうは議論を聞いていただいておりますが、聞いていただいた後に、きょうはその時間はないんですけれども、聞いていただいたそれぞれの区民の方も議論に参加していただくというインタラクティブな双方向性といえますか、そういったものを確保できるようにしていきたいということも話し合われました。

そしてまた、教育推進会議、きょうはありませんけれども、過去2回合体してやりましたが、総合教育会議、教育委員の方と私、区長との議論という場と、そして、必ずしもそれにとらわれない教育推進会議、ワークショップもできるし、講演なども場合によってはお願いできるということの組み合わせでより豊富な中身にしていこうというようなお話をいたしました。

そして、この教育推進会議のことも、こういったものを受けて、では7月24日に同日開催ということでいたしまししょうということで2回目が開催されました。この7月は、第

1部が教育推進会議でありまして、汐見先生の「豊かな人間性の育成について」、自己肯定感が低いこと、あるいは非認知能力の育ちの減少、立ち直っていくレジリエンス能力が低くなっていることなどをお話しいただき、子どもたちに結果だけ求めるのではなくて、試行錯誤、プロセスの体験を与えることが大事であるという御講演をいただいた後、シンポジウム「【点検・評価】教育課題を考える」、短時間でしたけれども、26年度学校視察の「体力向上の取り組み」、豊かな人間性の育成について議論をいただいて、ちょっと休憩を挟んで、このメンバーで総合教育会議をいたしました。

汐見先生の講演を受ける形で、多様な学び・教育の実現はどうしたらいいのか、そして教員支援という概念ですね。学校支援というふうに言いかえてもいいんですけども、現在、多忙化が極めてひどいと。セブンイレブンという言葉も教員の世界の中であると聞いていますが、朝7時に来て11時に帰る、フィンランドとは大分違うわけなので、これではなかなか健康に、また意欲を持って子どもたちを引っ張っていったり、ともに並走していくというだけの、その前にいろんな事務で、あるいは作業で非常に先生方は忙しくなり過ぎているんじゃないかということもあって、教育センターが現在世田谷区にあります、新しい教育センター、これは単なる引っ越しではなくて、新しい機能を添えていこうではないかというお話をさせていただきました。

次は3回目になりますが、10月17日であります。ここで今申し上げた学校支援についてです。実は、今教育長がフィンランドの話をしましたけれども、ここでは私が昨年行ったオランダのオルタナティブ教育、イエナプラン校という、異年齢の子どもたちが五、六人でサークルをつくって、そのサークルの中で大きな子が小さな子を教えるみたいなことも含めて、異年齢で学ぶ。それからもう1つは、学びのプログラムが個人別に編成されていると。したがって、同じ時間に国語をやっている子、算数をやっている子、歴史を勉強している子などがいるという。これはオランダで全て一般的ではないんですけども、随分歴史のある、そういう学びの姿なども紹介をさせていただきました。

また、オランダにおける新教育センターの1つの参考例として、オランダの教育サポートの拠点を紹介し、そこに豊富な教材などがあって、専門家がかなり機敏に、また的確に支援をしている様子などもお話をさせていただきました。そこを1つの切り口にしながら、幼児教育の充実、そして学校支援というテーマで新教育センター、そして特別支援教育ですね。障害のある子、発達障害を初め、さまざまな障害のある子が今教室の中に非常にふえていると言われていています。これは日本全国のデータでもそうですし、当区でもその傾向

は例外ではありません。

この特別支援教育の枠組みが来年の春から大きく変わります。いわゆる情緒障害の子どもたちに関する通級ですね。自分の学校と違う学校に特別支援学級に通うという形が原則廃止されて、自分の学校にいて特別支援教育を受ける、こういうふうになりますので、そういった中でどういう課題があるのかということも議論させていただきました。

その後開かれた教育推進会議におきましてはワークショップが開かれて、これは3つにグループ分けいたしました。幼児教育の充実、そしてともに考える学校支援、特別支援教育の今後ということで、かなり熱心な議論、そしてグループごとに発表していただき、閉じたということでございます。

ここまで振り返りをしましたけれども、特に2回、3回の教育推進会議との同日開催、あるいはワークショップの試みということについて少し意見交換をしたいと思います。

それでは、原委員、いかがでしょうか。

原委員 原でございます。

第2回、第3回の前後に教育推進会議を置いたということで、この総合教育会議そのものも随分深まり、幅も広がったかなというふうに思っております。また、この教育推進会議も、講演あり、シンポジウムあり、ワークショップありということで、御参加者の皆さんの数も多かったんですけども、実際に参加していただいた、例えばシンポジウムなどでは旗上げと呼ばれる方法、会場で移動せずに、その場で意思表示をいろいろな形でしていただきながらという進め方でしたので、参加していただくことができましたし、ワークショップはまさに御参加の皆様のワークによって進められたわけでございます。

区民の皆様も教育には多大な関心を日ごろから持ってきていることとは思いますが、実態はどうなっているのかとか、あるいはこれからどういう方向に進もうとしているのかとか、そして、それに対する御自身のお考えであるとか御意見とかというものを、なかなか伝えるチャンスも日ごろは少ないことが多いかなと思うんですけども、そういう点でもこの教育推進会議と総合教育会議を続けて行ったということは、私どもにとっても大変よかったと思っております。

今、日本の教育における絶対的な命題と言ってもいいと思いますが、生きる力の育成が挙がっています。この生きる力の要素としては、確かな学力、そして豊かな人間性、健やかな体、健康、体力と、この3つが大切な要素で、これをどうやってこれからの社会を担う子どもたちに身につけさせていくのか、育成していくのかということが教育における本

当に大きな課題なのだと思います。

世田谷においても、昨年度3月に策定いたしました第2次世田谷教育ビジョンで、地域とともに子どもを育てる、では、子どもたちをどういう方向に、どんなふうにして育てていくのかということについていろいろ策定をしたわけです。そして、今年度はもう行動計画に沿ってポイントを絞りつつ進めています。その中にやはり地域とともにということとあわせて、特別支援教育については、特別支援教育を私たちはいずれ特別であるというふうに感じない社会をつくっていくことが大事なんだろうと思っています。

特別な支援の必要な、障害のある人、あるいは障害のある子どもたちについても、その障害をマイナスのイメージで捉えるのではなく、1人1人の持つ個性の1つというような捉え方で、私たちは教育の場でも、そして教育を受けた後社会に出てからも、一緒にこの社会を担っていくことができるようにしていくことがとても大事だろうと考えています。教育委員会としても、それに対する対応を今かなり精力的に進めているところでもございます。まだまだ課題もありますし、予算もかかる場所もあるんですけども、とても大事な課題と受けとめてやっております。

もう1つは、教員の多忙の解消ということで、教育は人なりと言われますが、これはいろいろな意味にとることができると思います。1つは、もともと力のある方が教員として、その力量をしっかり発揮してもらうためにも、もっと簡単に言えば、子どもと直接かわる、子どもと向き合う時間をできるだけたくさんとることができるように、それを可能にするような、そういう状況を学校の中につくっていきたい、こんなふうにも思っていますので、その教員の多忙の解消ということも、では教育委員会として何ができるかという方向で、今さまざまな形で進めているところです。

そういうことの御理解をいただき、支援をしていただくためにも、このような形の今年度から始まったこの総合教育会議と、そして2回、3回の実施のように教育推進会議をあわせて行ったことはよかったと考えております。

保坂区長 ありがとうございます。原委員は現場で長いこと先生をされて、校長先生としても大分長い、そういった体験をもとにお話をされたと思います。

それでは委員のほうで、特に2回目、3回目の同日開催、そしてさらにワークショップで幼児教育や学校支援や、あるいは特別支援教育で皆さんの意見をお聞きになったかと思えます。御感想など、御意見をいただければと思います。

井上委員 まず、この総合教育会議ですが、今年度から制度が改まり始まりました。い

るんなところで総合教育会議というものがとり行われているわけですが、原委員の話にもありましたように、世田谷区の場合は保坂区長の思いもあって、特に2回目、3回目は会議だけではなく、汐見先生の講演があったり、あるいは本日のように堀教育長のフィンランドの報告があり、また、前回は保坂区長のオランダ視察の報告があるという形で、非常に大きな視野、視点から教育の方向性についての議論がなされたということが、恐らくほかの自治体の総合教育会議にはない特色ではないかと感じております。

世田谷区の会議ですから、当然、世田谷区の問題について語られるわけですが、どうかすると、世田谷区だけの問題にフォーカスされてしまいがちですが、時代の中での、そして世界の中での大きな動向を見ながら考えようとしていたことは、今年は特にスタートの年であったので、非常によかったのではないのでしょうか。

さらに、保坂区長が言われているように、区民の方たちとの議論も加えていこうとしたことですね。現場でのいろんなことをわかっているつもりでも、施策を推進する側がわかっていないということが起こりがちです。校長先生だけではなく、現場の先生の声を聞く、あるいは一般の、という言葉はよくないのかもしれませんが、保護者や区民の方々が今何を感じていらっしゃるのかということ、いろいろな工夫をして聞きながらやっていこうとしていることは、とても重要ではないかと考えています。

保坂区長 続いて永井委員にお聞きしたいんですが、特にワークショップですね。保護者の方もかなり多くいらっしゃいました。また、現場の校長先生も中にいらっしゃいましたし、ふだんなら余り顔を合わせて議論する機会が少ないメンバーで議論された。ごらんになって、お聞きになってどんなふうにとめられましたか。

永井委員 ワークショップで7月に汐見先生の基調講演で幾つかキーワードが出て、それをテーマに具体的に話をされたというのは、保護者や地域の方々にも、具体的に教育ということを考えるときにとても役に立ったかなというふうに思います。ワークショップでは、それぞれのテーマについて本当に具体的に話し合われていたようで、自分たちが世田谷の教育や施策に対して意見が言えるということは、世田谷も一歩前進したんだねというような声もありました。世田谷区の保護者は、教育に対して意識も強いですし、地域もまた自分たちの学校によりよい形で支援をしたいというふうに思っている地域の方々も多いなというふうにワークショップの話し合いを聞いて感じたところでもあります。

世田谷は、世田谷らしいというところで地域とともに子どもを育てるという教育に取り組んでいっておりますので、そういった保護者や地域の方々の声をぜひしっかりと議論し

て、これからの施策に取り組んでいきたいなというふうに感じました。

保坂区長 ワークショップで出た意見を若干紹介いたしますと、幼児教育については、例えば、区立幼稚園はさまざまな家庭のお子さんが来るので、本当に多様ないろんな子どもが集まるというところですよさがある。あるいは、子どもに対して地域丸ごととかかわり合っているような、親の子育てのみではなくて、地域丸ごとということやっていけないかということ。あるいは、これは汐見先生のお話ともつながりますが、そういった子どもの成長を地域全体で見守って、成功体験を、結果だけにこだわらず、プロセスも含めて褒めることも重要ではないかとか、地域のお祭りやイベントに参加をさらにしてはどうか。

2つ目の教育センター、ともに考える学校支援のところでは、やはり学校の先生は忙しいと。事務的な多忙、親対応の多忙、教育本来の授業準備等も欠かせないということで、こういった多忙を解消していく、そしてエキスパートを養成して学校に派遣をしたり、教育内容のサポートもぜひやってほしいと。地域を支える学校を支援するというところで、他の分野、ちょっと教育長の先ほどフィンランドの話にもかかわりますが、福祉行政や教育行政の垣根を外した一体化や横断化が必要ではないかと。あるいは、コーディネーターといますか調整役が教育センターにいてほしいと。

3つ目の特別支援教育については、来年から、来春からの制度変更に不安がある。かなり障害をお持ちのお子さんの保護者の方が多かったと聞いております。どんな制度になっていくんだろうかというお声から、障害のある子もない子ともに学んでいくと。相互理解も必要だということで、また、通常級における支援をさらに強めてほしい。そしてまた、障害のある子の置かれている状態について情報発信して、多くの方に知っていただきたい、そんな意見が出ていたということでございます。

では、澁澤委員長に御感想をお願いいたします。

澁澤委員長 個別の問題は皆さんお話しになったし、それからワークショップに関して言いますと、ワークショップに出させていただく前に汐見先生の講演も聞いていただいたし、事前にいろんな資料も読んできて出させていただいて、非常にワークショップとしては質の高いというか、熟考されて物を言われている方々の意見をまとめていったという非常にいいワークショップだったなというふうに考えております。

ただ、やっぱりこの1年間を振り返ってみると、総合教育会議のあり方というのが、広く市民の方々に物を知っていただいて、市民の方々から意見を吸い取るということが目的なのか、それとも、今世田谷の個別の教育の案件を首長さんも含めてより深く煮詰めてい

くということが目的なのか。これはある意味では両方とも目的なのだと思うのですけれども、その辺は、2年目からはやっぱりはっきり意識をして、どうするかということをやっ
ていかなきゃいけない。例えば、ワークショップのようにまずいろんな告知をして、多く
の方々に集まっていたいて、なおかつ考えていただいて、それを煮詰めていって、来年
からの行政に反映をしていくというような総合教育会議ができると非常にいいのかなとい
うふうに思っています。

もしそうなるならば、私たちは意外とさらっと流してきたのですが、ほかの地域の総合
教育会議を見ていると、ほとんどこの1年間は大綱づくりに費やされているのですね。
世田谷の教育では私どもは第2次世田谷区教育ビジョンを大綱という形で教育全般のここ
からここまでが教育の守備範囲と規定して、結構細かく分野ごとに煮詰めてきて、全体と
して世田谷というのは地域に根差して、まさにシンク・グローバル、アクト・ローカルで
できるような人材をつくっていきこうというところまで理論づけて教育ビジョンをつくっ
てきた。それがあったために、まさにそれが大綱でいいですね。それは、教育行政にかか
わっている人間にとってはすごくわかりやすい話なのですが、多分一般の区民の方にとっ
ては、教育というのはどこからどこまでカバーをしていて、どういうふうに考えているの
かということ、ある意味では大綱の浸透というのがまだこの1年ではできていなかった
のかなというふうにも感じています。

来年は、ぜひ少し戦略的に、どういうふうにそれぞれの総合教育会議をデザインしてい
くかという、逆に私ども事務局側に投げかけられた課題もあるのかなということで、この
1年を考えておりました。

保坂区長 ありがとうございます。

では、早速これからの課題のほうに入っていきたいと思えますけれども、今、澁澤委員
長のほうからありましたように、まず、先ほどちょっと説明が漏れましたけれども、1回
目にこの庁議室でやったときに、教育委員会で策定された第2次教育ビジョンを大綱と
してこの総合教育会議では位置づけましょうというところからスタートいたしました。た
だ、今澁澤委員長が言われたように、では、そもそもそのビジョンの内容がどういう中身
であるのかということ、区民参加型としたときに、その議論の詳細について、共有とい
うところで言うとまだ課題があるということでありまして、他の自治体では大綱をどうつ
くるかという議論をしていたそうですけれども、では、その教育ビジョンについても改めて
共有を図っていくような、あるいはこの点はもっと深化させてほしいというような課題を

いただくような、そういうことも今後の2年目以降の課題にしていきたいと思います。

プリントで2枚目の「世田谷区総合教育会議及び世田谷教育推進会議を踏まえた考え方の整理」というプリントを事務局で用意していただきました。この資料は、7月の汐見稔幸先生の基調講演、そしてアンケートをとっているんですね。ここでアンケートをお聞きした、そして今御紹介したワークショップでの意見、これらを整理したものであります。一応、左側が来年度から取り組むものということで、必要に応じて予算も伴うということで整理をされていますが、まず、筆頭に挙がってくるのは特別支援教育の充実というテーマです。これは、来年の春から障害者差別解消法という法律がいよいよ施行になります。障害者権利条約を日本も批准したことに伴って、国内法がようやくこれで整備されるということになりますが、この点からも、これまでの障害を持つ子に対する特別支援教育のあり方について変更していかなければいけない。変更というよりは改善ですね。よりよくしていかなければならないというタイミングになります。

そこで、特別支援教育の推進計画を策定したり、通常学級におけるサポート体制の強化や学校包括支援員をさらに充実していくことや、特別支援教室の導入と拠点校の計画的な整備などを、これは教育委員会のほうでも現在準備をしているということです。

もう1点目として、教員の多忙の解消ということですが、これはなかなか、すぐ着手して効果を上げるという点は難しいところがあるのですが、少なくとも、例えば給食の会計事務などについて少し整理をして、コンピューターシステムなども導入してその負担軽減を図ろうということは既に検討、準備が始まっておりますし、ここを切り口にして、次の二、三年のスパンで計画、実行というところがございますけれども、これは新教育センター機能による、そこをどうしていくのかという、新教育センターというものの基本構想、まさに内容について設計図を描いていく。この設計図は当然建物の設計図ということもあろうと思いますが、システムとしてどんなソフトを入れていくのか、どんな人的体制でいくのかということもあろうかと思えます。

また、そこにどんな教材が入るのかとか、学校の個別支援体制はどういうふうに必要なのか、そのことと支援を受ける学校との相互理解も必要だと思います。学校支援コーディネーター等の活用。

そして、次に幼児教育センターを、この新教育センターの立ち上げとともにつくっていくという基本的な構想の策定ということ、そして、幼児教育・保育推進ビジョンの策定ということで、このあたりは新教育センターに物理的に現在の弦巻から引っ越しもします

ので、単なる引っ越しではなくて、やはり内容の刷新と充実ということで考えています。

そして、右側が継続的に今後とも取り組んでいくべき課題で、自己肯定感が低いという問題。これは一朝一夕にこの部分が大きく変わるといふように、願いたいところですが、これはなかなか大変な課題であろうと思います。これも学校だけの問題ではないかもしれない、日本社会や、これまではある種失敗しないことが大事なんだということで私たちは教育を受けてきたわけで、そのことは社会でも、失敗しながら試行錯誤して最後に成功するという事例が少なく、失敗しないというところで価値を求めてきたところもこれまでの社会にはあったかと思います。しかし、これからの社会の中で、汐見先生も言われていた点数評価になってこない能力、さまざまなイマジネーションだったり、構想力だったり、あるいは臨機応変に激しく変化する状況に対応してチームを形成する力だとか、そういうところがやっぱりこれからの子どもたちにとっても重要だねということでもあります。

そして、子どもがたくさんの人とかかわれる環境づくり、世田谷区でいわゆる地域運営学校を初め、地域とともにということやってきました。他の地域よりそれは進んでいると思いますけれども、そこをさらに学校をお手伝いいただくという関係から、やっぱり教育や子どもたちへの支援、それをともにやるというような関係に引き上げていくことも重要なのかとも思います。

また、インクルーシブ教育、これは特別支援教育のところで先にいるんなことが変わりますが、しかし、これも非常に大きなテーマなので、継続して取り組んでいかなければならないだろうと。そして、先ほどフィンランドでもありましたソーシャルワーカー、福祉部門のソーシャルワーカー、ネウボラという話がありましたけれども、妊娠したことがわかったときから1人の保健師さんが就学前までずっとカップルを見ていく、お子さんをケアしていくという仕組みですが、そういうことと多分教育はもっともっとマッチングしなければいけないのだろうというテーマなどを一応課題として見ております。

これらの課題をどのように来年度の議論で深めていくべきなのかという点について、また各委員の皆さんの御意見を伺いたいと思います。

原委員からお願いします。

原委員 早急にとというのは、先ほどもちょっと触れましたけれども、特別支援教育の充実というのが喫緊の課題かなと思います。来年4月から具体的に特別支援教室という形で全小学校に配置されるわけですがけれども、最初から理想的な形でうまくいくというぐあいにはなかなかいかないと。ですので、来年度はここのところをかなり具体的な課題を拾

いながら、では、どう改善を図っていったらいいのかというようなことが、1つ、まずは取り組まなければいけない課題になるかと考えます。

そして、何よりもう1つは、世田谷は地域とともに子どもを育てるということを打ち出し、そして実践もしてきているわけですが、特に中学生ぐらいになると、してもらっ立場としてだけ子どもを捉えるという視点は、これは少し配慮しなければいけないかなと思います。子どももしてもらっと同時に、子どもが地域に何かお返しするという相互の関係をつくっていくような形で、一緒に地域とともに育てていくという。このあたりのところも、また今年度実施したような区民の方の御参加のもとに、何か具体的なものを打ち出すことができたらいいと私は考えています。

保坂区長 ありがとうございます。

では、次に永井委員から、いろんなテーマが挙がっていますが、どの辺のテーマをもう少し議論していきたい、取り組んでみたらというような御意見があると思いますので、お願いいたします。

永井委員 先ほどもお話しさせていただいたんですけれども、保護者も地域の方も、学校をサポートしたい、お手伝いしたい、先生は忙し過ぎるというのは、本当にもう口を開くと保護者の方たちも合い言葉のように話をしておりますので、そういったところでここにすぐに取り組むものというところでも、二、三年程度のスパンでというところでも、地域の人材ということが書いてあります。ぜひそういったところの仕組みづくりに取り組んでいただきたいし、また、取り組んでいかなきゃいけないのかなというふうに考えます。

保坂区長 次に井上委員なんですが、さまざま世田谷区の学校運営にも携わっていただき、また、来年度以降のテーマについて、今多忙化の話が出ましたけれども、どのようなことに着目して、また少し議論の仕方、ワークショップもやりました。あるいは汐見先生の講演もありましたが、今、澁澤委員長からは区民と共有するという部分と、共有したところで区民から出てきた課題があるわけですが、その課題をもうちょっと煮詰めてこういうふうに展開したいということでの打ち返しといいたいまいしょうか、そういう部分も多分必要なんだろうと思います。そうした来年度以降の総合教育会議あるいは教育推進会議も含めて御意見をいただければと思います。

井上委員 的確な意見になるかどうかわかりませんが、きょうの午前中の教育委員会定例会で、特別支援教育の計画案が示されたのですが、その中で「世田谷型インクルーシブ教育システム」という言葉が出てまいりました。そのときに私が質問をし、少し議論した

ことは、「世田谷型」のインクルーシブとは何だろうか、ということです。制度ができて、それが実際に展開されるときに何々型と自治体の名前を冠して言われることがあります。その際に、制度でイメージされているものにはまだなかなか到達できないけれども、当面うちはこれでやっていこうというような意味で何々型という言い方がよくされるようです。他方で、標準的なものよりも、さらにいいものを目指しているときにも、何々型と言われる場合があるようです。

世田谷の場合は、標準以上のことを今まで目指してきたし、国の制度に先んじているんなことをしてきていますので、そういった意味でいろんな蓄積がある。教育計画についても、今、第2期ですけれども、第1期のときもさまざまなことをしています。これまでやってきたことを拡充するような施策、あるいはリーディング事業という形で現在、力をいれようとしていることもあります。そういったものを踏まえながら、世田谷の、例えば特別支援教育であれば、ほかの自治体とどのような点で違う特色があるのか。こういうことは、世田谷のなかにいる区民の皆さんや保護者の皆さん、あるいは先生方はわかっているんじゃないこともある。客観的な目で、ほかの自治体ではなされていない、あるいは世田谷の地域とともに子どもを育てるといって、これまでのいろんな仕組みや活動の厚みを点検しながら、「世田谷らしさ」というのをもう1度見つめ直してやっていくことが大事ではないかと考えております。

もう1つ、先ほど、「今後、取り組んでみたらということがあれば」と保坂区長が言われましたが、例えば、子どもの学力をつけるというようなことは当たり前のことですが、目に見えやすいものと、なかなか見えにくいものがあると思います。区長がテーマとして大事にされている自己肯定感の話にしても、どういうことをすれば、自己肯定感が高まるかはとらえにくい。ただ、そういった、単純にテストで点を取るというようなことではないことを、私たちは大事にしていこうよと。子どもの自己肯定感を育むために、どのようなことに取り組んでいけばいいのか。そういう子どもを見る目の豊かさのようなものを区民のみなさんと一緒に考え、高めていく。それができるのがこの世田谷区ではないかと思っています。

ですから、子どもの自己肯定感が低いから、単にこうしようというだけではなくて、すぐには効果として現れないかもしれないけれども、子どもを見る目の豊かさというようなテーマに息長く取り組み、一緒につくっていくというようなことがこうしたワークショップでできるのではないかなと期待しております。

保坂区長 井上委員の意見を受けて、世田谷型、世田谷モデルとか、いろいろそういう言葉も使いますが、例えば一例ですと、介護、高齢福祉は、これから高齢で介護が必要な人が非常に激増すると。こういったものを受けて、27カ所ある出張所と街づくりセンターに今身近な福祉の相談の窓口を形成しようとしております。これは一応世田谷型地域包括ケアモデル、あるいは世田谷モデルというようなことで議論していますが、実はその地域包括という国の概念の中には、例えば子育て支援とか、児童虐待防止とか、そういうものも実は入ってくるわけなんです。ですから、多分そういう地域で身近なというと、まさに小学校、学区という面としての地域のつながりがかなり、これまでの町会・自治会などの地域のつながりは、一定程度年齢層が高いところでつながっているのに対して、30代、40代、あるいは場合によっては20代の親たちがつながるという意味では非常に貴重な機会だと思います。

それでは、澁澤委員長にこれからの展開についてお聞きしたいんですが、前回ちょっとオランダの事例を駆け足で、そして今回フィンランドの事例をまた駆け足でやりましたけれども、私たちは多分教育を考えると子どもたちの学び、その学び方、あるいは学びの場の提供の仕方、教育のあり方というふうに言ってもいいかもしれませんが、そういうところをやはり時代の変遷とともに進化させ、また、よりよく発展させるということを考えてときに、多分オランダにしるフィンランドにしる、それぞれの取り組みというのは非常に私たちの目を覚ましてくれるものとか、刺激してくれるものが、示唆に富んでいるという言い方でいいかと思いますが、日常的な学校運営だとか、地域の教育を考えると、この総合教育会議では、できれば幅広い視点で、そしてなるべくただそれを教養とか評論で終わるのではなくて、現実の改善に生かしていくということで議論を展開できたらと思うんですが、その点にも触れていただきながら来年度以降の展開を。ちょっとリクエストがいっぱいあって済みませんが。

澁澤委員長 今、区長が言われたことに私がもし正解を持って答えられると、多分この会議は全くする必要がないぐらいのことに多分なってくるのだと思うんですけれども。私は仕事でオランダが十数年と長かったんですけれども、オランダにしてもフィンランドにしても、要するに働き方が全然違う。働き方がどう違うかということは、その向こうにある何をもって幸せと思うかというその幸せ感が、やっぱり今の日本とは大分違うだろうなと。私のオランダの経験から言うと、それに対して物すごく議論をしてきた歴史があって、企業も、それから行政も、それからNPOも、例えば私はNPOですが、NPOの側から

言うと、例えば行政職員にしても、それから企業人にしても、NPOの3つか4つに入っているのは当たり前。小さいNPOが1団体大体10万人の会員とかいうぐらいの単位なんですね。ということは、NPO、要するに自分たちが、昼間は会社で働くけれども、それ以外に1人の市民として、パブリックというのは単に行政がやるものじゃなくて、市民がパブリックとして参加する。自分たちによりよい社会をつくるんだという本来のパブリックの意味。

日本は、明治時代に翻訳を間違えてしまって、パブリックというのはいかにも行政がやることになっていきますけれども、民のやる公的なものとは何なのか。その公的なものというのは、幸せな社会をつくるためという取り組みから議論がずっとされてきましたので、地域といってもそれぞれのファクターが物すごく議論をしてきた歴史があって、それぞれの信頼関係がまずあるのだということがあると思います。

ですから、日本のように、どちらかという上から下へ流してきた、それは狩猟民族と農耕民族の違いまで言ってしまうえばそうなのかもしれませんけれども、そういう社会とは若干違った、ただ、日本でも江戸時代まではそういう社会だったわけで、もう少し、みんなが参加して考えるという民間がやるパブリックというものが、行政も引き込んで考える必要があって、その中で多分世田谷らしい教育というのが出てくるだろうなと思ってます。

私はとても今回衝撃というか、非常に私のはっとさせられた言葉が、この間のワークショップの中で障害を持っている児童のお母さんが、実はそのことを多くの人に知ってもらいたいのだと。多くの人に知ってもらって、私だけに子どもの将来の責任を負わせないでくださいと。地域の人たちみんなに逆に知ってもらって、そしてその中からいろんな形で助けてもらう人が出てくるような地域にしてくださいというお話があって、すごく衝撃だったです。障害があったことを日本社会の中ではどちらかという隠してきて、外に知られないようにうちの中だけで解決しようとしてきた。その中から、そういうような声を言っていただくお母さんが出てきたということ。

それから、先ほど 原委員もお話しになっていたけれども、地域が子どもに何かしてあげるということも重要だけれども、では、子どもが地域に何を返せるのかと。それは、そのまま子どもというのを学校に当てはめると、地域の方々から今まだ学校が支援をいただいているという形だと思うのですが、今度は学校が地域に対してどういう役目を持って、どういうことを返せるのかというようなことが考えていける場になっていくと、もう1回その地域で暮らす、そこにどういうファクターがあって、みんながやはりそれは、地

域というのは今後の新しい幸せを求めようとする時の核なのだと思います。

その幸せとは何なのか。ある意味で世田谷区は、それはいろんな方がいらっしゃいますけれども、行政の中でのいろんな資金的なものですとか、あるいは平均しての個人所得ですとかということが、ひょっとしたらほかの自治体より恵まれているかもしれない。では、恵まれているならば、今までの価値観ではない次の時代の幸せ感をどういう仕組みで、どうやってつくれるのかということを考えられるのが多分世田谷ビジョンというか、世田谷区の独自性、世田谷モデルなのだと私は思っています。

その意味では、今回の中でずっと、特に教育推進会議では、今まで知徳体の最初に体をやって、ことしが徳でということがあって、知に対しては議論していなかった。その知というものが、単なる文字による知識だけではなくて、汐見先生から非認知能力ですとか、暗黙知がとても教育の中で重要だと。それに絡んで幼児教育の問題が出て、やっぱりゼロ歳から子どもたちをどう地域と一緒に育てていくのかという視点というのは、これはどこもまだ取り組んでいなくて、世田谷がしっかり取り組まなければいけない課題。

もう1つは、ここにも書いてあるように、教育と福祉というのは本当に連携しなきゃいけない時代を迎えているときに、教育と福祉の間にまだ壁があって、どちらかという両方とも理念が優先してしまっていて、システムをまだつくり得ていない。今まさにこの教育委員会の中ではシステムをつくっていかうとしているときに、一緒に福祉部門が手を組んで、やっぱりその世田谷的システムをつくっていける。また、そのためにはどういうふうにしていったらいいのかと。その辺の議論を少し突っ込んでできるといいのかなというふうに思っています。

保坂区長 それでは教育長、端的に、短くお願いします。

堀教育長 各委員の方々のお話を伺っていて大変驚いたのは、フィンランドの視察のときにそういう話があちこちで出てまいりました。例えば、原委員の中学校になったら子どもたちがサポートされるのじゃなくてサポートするみたいな話は、もう2016年のカリキュラムの中に入っていて、学校運営に子どもたちが参加するという形がありましたし、永井委員の地域の方々というのは、今現在学校おじいさん、おばあさん、例えばそういう形で学校のいろんなことに参加していただいているようです。インクルーシブは当然ですが、推進しておりますので、1人1人の個性を尊重するという教育がもうフィンランドでは当たり前になっているということがありましたので、お話を伺っていてなるほどと、復習をしているような状況でした。

私の立場から1つだけお話しさせていただきますと、このような教育を誰がするかというと、教員、学校がするんですね。最初にお見せしましたように、職員室の光景が日本とフィンランドの教育の質の違いをあらわしているかなと思っております。非常にフィンランドは教員が勉強もしますけれども、自由にああいうふうにコミュニケーションします。そういう場所をつくって、校長が教員たちに、意見交換をしたり交流するという機会をつくってくれていますので、教員は伸び伸びと仕事をしています。ですので、教育長という内容というか役割を問われれば、教員の1人1人が多忙という言葉ではなくて、やっぱり子どもたちのために教育をできるという環境をつくっていきたいなということを改めて思いました。

先ほど教育委員会でも話したんですが、フィンランドは1月に3日間、教育メッセというイベントがあるようです。これは、学校の職員室をメインにして、なぜかそこにはその日はシャンパンが置かれているようです。それでリラックスして、教育についての意見交換をしましょうということで、家庭が来たり地域がいたり、何と大統領も来て、教育についての意見をまず述べて3日間のイベントを行うということのようですが、それだけ国が力を入れているというあらわれではないかなと思っております。

したがって、教育長の役割としては、教育をするのは教員であるという原点に立って、今、第2次教育ビジョンを進めておりますが、多忙解消を進めると同時に、1人1人が自由にいろんな発想を持って教育ができる環境をつくっていきたいなと思っております。

最後になりますが、フィンランドでよく聞かされた言葉は、ラーニング・バイ・ドゥーイングという言葉でした。これは汐見先生の話にもありましたが、体験をすることによって学んでいくんだ、それが自己肯定感を育てることにつながっていくということで、何度も何度もラーニング・バイ・ドゥーイングということを聞かされておりましたので、できるだけ子どもたちにはこういう考え方を導入、徹底していきたいなと思っております。

以上です。

保坂区長 各委員の御発言の中でも、私がまとめるようなことがほとんどなくなってきたんですが、あえて申し上げますと、この総合教育会議は区長が主催をしています。そして、教育委員の方に参加していただく。ただそれだけではなくて、教育推進会議と同日開催と。これはおおむね方向性としては来年度以降もそういう形はぜひとっていきたい。区民の方に参加をしていただく。区民の方は、中身ですが、保護者の方だけではなくて、例

えば、あるときには子どもたちに参加してもらうのもとても重要なこと。子どもたち自身が教育を受けている当事者であって何を感じているのかということもぜひ知りたい。多忙感といいます。私は具体的には断片的な新聞記事とか学校教諭の話の断片で想像するだけで、学校の先生のいわば直面している多忙なら多忙という具体について、もう少し教員自身の率直な声みたいなこともお聞きしていく必要もあるだろうというふうにも思いました。

先ほど澁澤委員長のお話があったんですが、大きく広げて発信し、多くの区民に来てくださいと。そして、話し合えよう。問題点があったら問題点を出示しようというのが、特に前回やったワークショップ形式だと思うんですが、同時に聞きっぱなしにしないということも大事ではないかということですね。ですから、総合教育会議として少し課題整理をしたりする機会もつくりながら、問題として挙がってきたことについてしっかり再提示していけるような、そういうインタラクティブな運営を心がけていきたい。

一昔前は、本校にいじめはございませんと言うと、それは立派な学校ですねというふうに言っていたんですね。これは間違いだということによってよくなりました。いじめがないんじゃないかと、あってもないことにするというまでは言いませんけれども、ないということが評価された。そうである限り、日本全国ほとんどなかったんですね、文部科学省の統計で。でも、それは違いうだろうということで、やはり子どもが危機に陥るようないじめはあったわけだし、この世田谷とて例外ではないと思いますので、そういうことについて完全にできている、行政もそうですし、教育も、全て準備万端整えて問題はないということはある得ないわけで、人間集団である以上、いささか配慮ができていない点であるとか、あるいは少し滞っているところだとか、これはあって当然なわけで、そういうことを率直に出し合い、それを出しただけでなくて、やはり解決するというのを、ぜひ教育委員会の皆さんに私のほうからはお願いをしたいことでもあります。

そして、きょうはこの本庁舎でやっていますが、世田谷区は広いんですね、88万人住んでいて。例えば玉川地域とか烏山地域とかそれぞれありますので、来年度以降は地域開催、この総合教育会議、教育推進会議を少し巡業ではありませんがいろんなところで開きながら議論を深めていくということも射程に入れながら進めていきたいと思っております。

以上をまとめにして、ちょっと予定時間をオーバーしましたが、今年度の総合教育会議を終わりたいと思っております。御協力ありがとうございました。

午後0時28分閉会